

## 教室でスペイン語を媒介言語として使用することは

### モチベーションを上げるか？

大分大学 柿原武史

(TADESKA : 2011 年 7 月 9 日 (土) : 関西学院梅田キャンパス)

#### 1. はじめに : スペイン語教育の目標は？

参加者からは、「使える」「話せる」というキーワードが挙げられた。

「使える」「話せる」ための授業実践とは？ コミュニケティブなのか？

教室でスペイン語を教員はどれだけ用いているのか？

文法解説などに追われ日本語だけの授業になっていないか？

#### 2. 日本の学校における英語教育の動向 「コミュニケーション英語」？

・外国語活動…小学校第 5, 6 学年から週に 1 時間導入

・外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

・高等学校の外国語…授業は英語で行うことを基本とする。

→大学の外国語教育も変化が求められるのではないか？

#### 3. スペインの教育制度と複言語主義

##### (1) スペインの外国語教育 (教育法の規定)

2006 年 : LOE (Ley Orgánica de Educación: LOE) …初等教育第 1 段階へ必修、第 3 段階へ第 2 外国語も。

2006 年勅令 1630 号 (Real Decreto 1630/2006) →幼児教育の第 2 段階で外国語に触れることを奨励。

##### (2) EU の複言語主義

2001 年…欧州評議会→CEFR (Common European Framework of Reference for Languages) 公表

2002 年 3 月…欧州市民が母語に加えて 2 つの言語の知識を有することを目標とする。

#### 4. マドリード自治州の二言語教育…Madrid, comunidad bilingüe

##### Proyecto Bilingüe

2004-05 年度 : 初等教育から開始 (当初 26 校→現在 : 242 校/782 校)

2010-11 年度 : 中等義務教育でも開始 (現在 : 32 校/322 校)

##### 初等教育 : Colegios Públicos Bilingües

英語の授業は毎日 1 時間、週 5 時間

英語の授業を含め、全授業時間数の少なくとも 3 分の 1 を英語で授業

算数とカスティーリャ語以外のいかなる分野も英語で実施可能 (社会・文化に関する知識領域は、英語で)

##### 中等教育 : Institutos Bilingües

##### Programa bilingüe

毎日 1 時間 (週 5 時間) の英語の授業

ホームルーム (tutoría) と他の 1 科目 (体育、芸術、音楽、技術、人権市民教育、倫理) は英語で実施、

生徒のレベルに柔軟に対応したグループ分け、課外活動の英語による実施

##### Sección bilingüe

毎日1時間(週5時間)の英語の授業(上級英語 inglés avanzado)

第1~第3学年…社会科学、地理、歴史、自然科学(第3学年…少なくとも生物と地学)を英語で実施

第4学年…上記に加え、もう一つ別の科目も英語で実施

数学、カスティージャ語と文学、第2外国語以外の科目を英語で受講可能、tutoría も英語で実施

全授業時間の少なくとも3分の1は英語で実施

## Content and Language Integrated Learning (CLIL)

教育媒介言語として通常とは異なる言語を用いて教育すること。言語学習とは関係ない科目を異言語で教育。

マドリード自治州の二言語教育では、英語で実施する科目は、完全に英語のみを使用する。

教材も英語のみで発行されたものを使用(自治州カリキュラムに適合したものが出版社より刊行されている)

### 5. 現場における実際の運用(授業見学の報告)

#### (1) 初等教育校 CEIP San Cristóbal の場合

ビデオで授業の様子を見てみた。

#### (2) 中等教育校 IES Cervantes の場合

音声で授業の様子を聞いてみた。

(いずれも、スペイン人教員が英語のみで英語の授業を実践していた。初等教育高学年以上のクラスでは児童生徒も英語で返答していた。初等教育低学年では児童は単語レベル。)

### 6. 今日のアクティビティ ディスカッション

- ・専攻の学生を教えている方と第二外国語としての学生を教えている方に分かれて議論。
- ・学習者のレベルとスペイン語の使用(入門、中級、大学の偏差値レベルによる違い・・・)
- ・使う頻度(最初使って以後使わなくなる。簡単な指示だけ。挨拶のみ。全く使わない・・・)
- ・学習者のモチベーションを高めた、下げたスペイン語の使用(喜んでまねる、黙ってしまう・・・)
- ・特定の文法事項の説明に英語を用いることの是非(serは英語のbe動詞みたいなもので・・・)
- ・近年の英語教育の変化に伴う学生の変化(学生はコミュニケーションな授業に慣れてきているのか?)
- ・教員のモチベーションとスペイン語の使用(教員自身がスペイン語を使いたい、使いたくない・・・)

以上のテーマについてディスカッションを行ったところ、以下のような意見が出された。

①専攻向け授業では指示などは日本語で行い、スペイン語を使う必要はないとの意見を有する教員が多く、非専攻では指示や評価のことば(muy bien)などにスペイン語を使っている教員が多いという特徴。

②教員が使うだけでなく、学生に使わせるよう仕向ける努力が必要。

③スペイン語を当初から意味もわからず使わせたり、教員が使ったりしていると、文法事項の説明時に「あ、これだったのか!」と学生が気付いた場合の反応は学習者のモチベーションを高める。

④初期は、ジェスチャーを交えてスペイン語のみで指示するといった工夫が効果的。

⑤近年の学生は、読ませたりすると、以前よりも恥ずかしがらず声を出すように。(公教育の変化の反映?)

⑥非専攻では単に「スペイン語」の授業ではなく、コミュニケーション能力向上や英語・日本語の復習の授業に。

⑦学生同士が使ってコミュニケーションを取れるような表現を毎回授業で提示していく。

⑧ネイティブ教員としては、専攻向けにはスペイン語のみ。非専攻向けには日本語を交えるなどして対応。

⑨効率主義の学生も。わからない言語で指示されるより、わかる日本語での指示を求める。